

茶の湯文化学会会報 No.3

第3号 / 1994年10月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

「大唐長安展」への誘い

京都文化博物館 片岡 肇

「大唐長安展—京都のはるかな源流をたずねる—」が九月九日に開幕した。この展覧会は、平安建都一二〇〇年ならびに京都府・陝西省友好提携一〇周年を記念する特別展で、中国陝西省から出展された優れた唐代の文物によって、平安京を初めとするわが国の都城のモデルとされる唐の都長安を再現するとともに、唐から直接わが国にもたらされた文物やその影響を物語る国内の資料などによって、平安京と長安、京都府と陝西省の交流の歴史の原点を再確認しようとするものである。

展覧会は序「長安への道」に始まる。第一部「栄華の都・長安」では、三彩や彩絵の俑、精巧な作りの金銀器などを多数展示して長安の華やぎを紹介する。コンピュータ・グラフィックスによる映像が、平安京の四倍近い長安城のスケールの大きさと、含元殿や麟徳殿といった建物群の連なる宮殿大明宮の壮大で華麗な姿を再現する。部分的ではあるが、展示室内



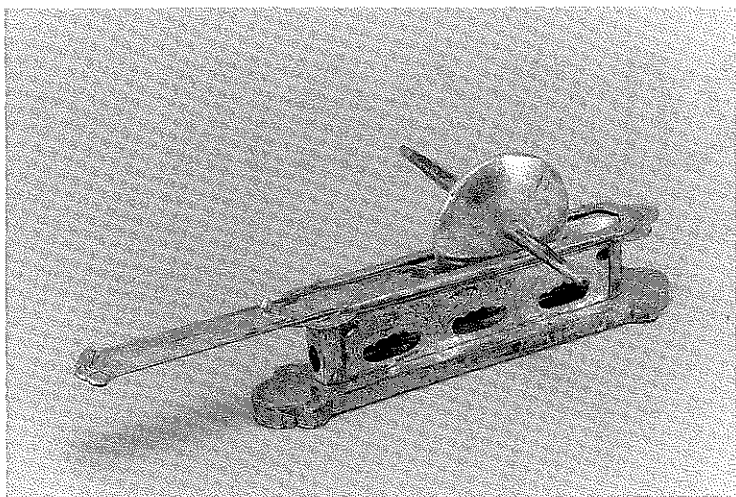
一級文物 銀金亀形銀盒

に実物大で復原された章懐太子墓は、精密に模写された壁画とともに、現地を訪れたような臨場感を味わせる。ここでもコンピュータ・グラフィックスによって全ての壁画が鮮やかに再現されており、描かれた當時を彷彿とさせる。

第二部「はるかなる長安」では、胡人俑や三彩のラクダや西域の影響を示す文物を展示して、シルクロードの起点としての国際都市長安を紹介する。さらに、正倉院の宝物の精巧な複製品や、空海らによって直接唐からもたらされたもの、唐の影響を物語る国内資料などから、わが国と唐、平安京と長安のつながりを振り返る。

今回陝西省から出展された一級文物十八件を含む一二〇件の唐代の文物は、いずれも西安およびその周辺から出土した優品ばかりであり、陝西省関係者が質量ともに過去の文物展で最高のものであると自慢するほどである。なかでも特筆すべきはやはり法門寺出土の茶器であろう。法門寺は

仏舍利を持つ寺として唐王朝の厚い庇護を受けた寺であった。九世紀の後半に仏舍利とともに地下に埋納された金銀器・絹織物・ガラス器などがおよそ一一〇〇年の眠りからさめて一九八七年に発見された。今回それらの中からわずか三件ではあるが唐代の茶器が展示された。唐代の喫茶を直接物語る必見の資料である。



一級文物 鍍金鴻雁流雲紋銀茶碾子(高さ6.5cm)

焦点をあてて説明したい。

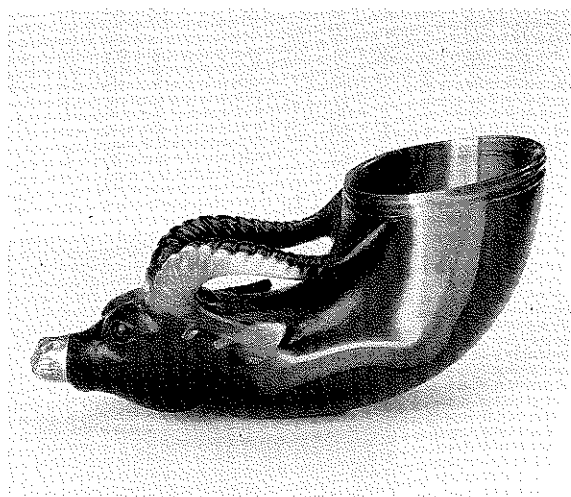
最初に各所に所蔵される大菊棗は出光美術館所蔵の「下絵集」に原図があり、その制作年代や技術過程がよくわかる貴重な作品である。次に静嘉堂文庫所蔵の片輪車棗は、その箱に羊遊齋自身の書付があり、「下絵集」にも片輪車手箱の控えがあり、羊遊齋が蒔絵の古典作品を学習したことがわかる。

また心経香合は「下絵集」に文字が書き込まれており、また不味の花押のない同紋の香合の所在もわかっており、羊遊齋作品の受容について考えるとき貴重な資料となる。

その他かまきり・椿・きりぎりす紋などの香合があり、これらは「下絵集」にそのままの図はないが、印籠などの下絵にきわめて強い類似性が認められる。また野村美術館に所蔵される酒井抱一下絵になる懐石膳や吸物椀は、羊遊齋と江戸琳派の関係が知られて興味深いものがある。

不味の茶会記についてはまだ十分に調査していないが、煙草盆や風炉の小板に羊遊齋作のものが使われたことがある。この不味との関係についてもよくわからない部分が多く、今後の課題としていきたい。

以上約一時間にわたる発表のあと質疑が行



一級文物 牛首瑪瑙杯(高さ6.5cm)

本展覧会ではこれを契機に「法門寺の茶器と喫茶の一二〇〇年」と題する特別陳列を企てた。平安時代から茶の湯の成立頃までのわが国の茶の歴史を、「大唐長安展」にふさわしく唐物を中心に構成してみた。茶の歴史にも平安京を造った人々の唐への憧れにも似た大陸への憧憬の念を、その底流にうかがうことができる。

なお本展覧会の会期中に八回にわたって記念講演会を開催する。十一月五日(土)には、茶道資料館副館長の筒井絃一氏による「唐代の茶法―煎茶と点茶―」を予定している。

なわれたが、会場からは、羊遊齋の作品は個人の作品というよりは工房作品と考えるべきものが多いのではないかと、従来いわれているようなコレクターとしてだけでなく不味がディレクターとして活躍しはじめたのはいつごろからか、漆壺齋との関係はどうであったのか、羊遊齋作品には三十個制作されたものがあるが、あり藩の収益に寄与することを目的にしたのではないかと、など様々な視点からの質問あるいは今後の研究方向の示唆などが出された。

『過眼録』と酒井抱一

山口大学 影山純夫

江戸時代後期の茶の湯関連史料としても重要だと思われる霞兄老人(一八〇〇?)による『過眼録』(七十七冊、国立国会図書館蔵)を紹介したい。

筆者の霞兄老人については、その素性を明かにしないが、『過眼録』第十六冊に「慶応丙寅 年六十七」とあるところから、寛政十二年に生れ、晩年は江戸両口に住していたことが知られる。

さらに収録内容から推して水戸徳川家や小堀家、酒井抱一らとも係わりの深い人物であ

第一回研究会報告

当学会の最初の研究会が、八月二十七日(土)午後一時半から京都市左京区の京大会館で行われた。例年になく残暑が厳しく、どれほどの参加者があるのか気遣われたが、会員六十名のほか、一般からも三十三名の参加があり当初用意した椅子が足りなくなるほどの盛況であった。発表者は学習院大学大学院の小林祐子氏と山口大学助教授の影山純夫氏で、その要旨は左記の通り。なお影山純夫氏の発表内容は当学会誌第二号に掲載の予定。

蒔絵師原羊遊齋と松平不味

学習院大学大学院 小林祐子氏

これまでの原羊遊齋についての研究は

- 一、人物に対する興味中心の時期
- 二、「下絵集」を主対象にした絵画論的研究の時期
- 三、社会的背景も考えながら蒔絵師原羊遊齋として総合的に理解しようとする時期

の三期に分けることができる。今日はスライドを使用しながら、羊遊齋の基準作をそれが制作された動機や制作技法に

つたようだ。特に抱一は『過眼録』の一八二五年(文政八年)の題箋を自ら記しており、編纂にかなりの影響を与えたであろうことを推測できる。

『過眼録』は一八二〇年(文政三年)から一八六七年(慶応三年)までの内容を含んでいるが、通例の美術作品の模写ではなく、茶書、書、茶道具、拓本、和漢書、茶会記などを中心として収録されている点は興味深い。

書としては大徳寺の江月宗玩、清嚴宗潤や松華堂昭乗関係、絵画では探幽、尚信、常信ら狩野派に混じって、琳派のものが多い。

茶書としては『利休百会記』・『松屋会記』など周知の史料に混じって『宗甫公茶湯節之覚』『小堀遠江守茶湯覚書』など遠州関係のものが目に付く。

特に興味深いのは茶会記であろう。これまでほとんど紹介されることのなかった抱一が雨花庵で行った茶会(二会)や水戸斉修・西村藪庵などの茶会が収録され、そこには芳村観阿・本屋了我・佐原菊鳩・久貝太郎兵衛など江戸後期の文化人たちに交じって、鷲蒲・弧村・抱和など抱一派の絵師たちの名がみられる。これらの意味でも江戸時代後期の茶の湯史料としての『過眼録』は重要であろう。

平成六年度総会・大会のお知らせ

平成六年度茶の湯文化学会総会・大会を
左記のとおり開催いたします。

記

日時 一九九四年十月二十九日(出)

会場 ホリデイ・イン京都 ホリデイホール

(京都市左京区川端通北大路下る)

参加費(資料代を含む) 千円

次第

受 付／九時三十分より

研究発表／十時～十二時

原田三壽：茶の湯資料として見た宝積寺

絵図

横内 茂：「茶席挿花集」について

松下 智：抹茶習俗の変容について

(予報) 尾張津島地方の事例―

三崎義泉：「茶の本心」と本覚思想について

総 会／一時三十分～二時二十分

研究発表／二時三十分～四時

福良弘一郎：狂言本に見る茶の表出

井上秀二：備中・備前・備後の茶人

東 君：固形茶から散形茶へ

講 演／四時二十分～五時三十分

布目潮風氏(大阪大学名誉教授)

唐代の茶器

―大唐長安展に寄せて―

懇親会／六時～八時(懇親会費九千円)

※総会・大会開催にあわせて会員サービスと

して、京都文化博物館・北村美術館・茶道資料

館・野村美術館・楽美術館の入館割引券(十一

月六日まで有効)を発行の予定。

第二回研究会開催のお知らせ

茶の湯文化に関わる各分野の研究発表を行
い、研究の進展を目指す研究会を左記の通り
開催する予定です。

日時 平成七年二月十二日(出)

午後一時三十分～四時三十分

会場 京大会館

参加費 無料(非会員は五百円)

※研究会における発表者を募集しています。

一題につき報告一時間、質疑応答三十分程度

を予定しています。報告を希望される方があ

りましたら、事務局までご連絡下さい。

事務局報告

*会報第三号をお届けいたします。本号には
京都文化博物館で開催中の「大唐長安展」にち
なみ、同館の片岡 肇氏から原稿をいただき
ました。総会・大会にご出席の会員の皆様は、
同館をはじめとする京都市内の美術館・
博物館の割引入場券を発行の予定ですので、
ご利用ください。

*昨年度の総会は何年に一度の大雪に見舞わ
れ、参加の予定を取り消された方も多かった
のですが、今回はなんとか秋晴れになってほ
しいものです。

*会誌の発行が遅れておりましたが、ようやく
編集作業も終了し、総会までにはお手元に
届けることができそうです。

*来年度からは総会・大会・研究会を京都以
外の地域でも開催したいと思っております。会場と
して、また研究会の見学場所として適当な所
があればお知らせください。

*平成六年度の会費を未納の方は、できるだ
け早くお納めくださいますようお願い申し上
げます。

*次回の会報は十二月頃発行の予定です。